

教育目標	重点目標等		担当	目標達成のための方策	評価項目	評価値の 元データ	R4			評価	自己評価	改善策	学校関係者評価	
							平均	%	評価				評価	コメント
普通教育ならびに情報・ビジネスに関する専門教育を施し、健康で、心豊かな人間性を育成する ①地域を担う、情報・ビジネスに関する将来のスペシャリストの育成【専門性の育成】 ②社会人としての規範意識や倫理観を身に付けた感性豊かな人間の育成【人間力の育成】	学習の基盤となる資質能力の育成	①基礎・基本の徹底	教務 1年 2年 3年	(授業と家庭学習) 家庭学習・望ましい授業態度を育成する。 ・家庭学習の習慣を身につけさせる。 ・基礎学力向上講座や定期試験前特別講座など、学習不振者への対応を充実させる。 ・学年会、教科と連携してスタディサブリの効果的な運用をはかり、基礎学力の向上を目指す。	・授業に真剣に取り組んでいる生徒の割合(生徒肯定回答9割)	生徒アンケート2	3.3	89	A	B	・生徒の授業への取組については昨年度からやや数字を落としたが、落ち着いた授業となっている。 ・「家庭学習・・・教員割合」は昨年度から34pと大きくダウンした。また「家庭学習・・・生徒割合」も昨年度から10pダウンしており、家庭学習の指導が行き届きにくい環境となっていると考える。宿題や課題については、週あたりの授業時数や教科の特性もあるが、教科科目間に差があることは否めない。 ・試験直前等の各講座が有効と考える教員の割合が23p低下しており、講座が有効な手立てとしての実感が、感じられなくなっている。 ・スタディサブリについては、今年度は学年全員同一問題を解く一斉学習から生徒個人の習熟にあわせた問題を解く個別最適化学習に問題配信方針を変更した。また、生徒は真面目に取り組んでいると回答しているのに対して、教員の評価が低いのは11月に実施した到達度テストの結果が4月と比較して教員の期待する基準に達しなかったからと思われる。	・来年度は全学年で生徒一人一台端末がそろい、端末・アプリ及びクラウドを活用し学習教材の共有がしやすい環境となる。教員は、授業づくりの打ち手が増えるため、興味・関心を引く授業づくりを目指していく。あわせてクラウドを活用することで授業と家庭学習の往還がしやすくなるため、クラウドを活用した働きかけも目指す。 ・望ましい学習態度(家庭学習の習慣化)を育成するためには、進路指導・生活指導を含めた全般的な指導を行い生徒の意識を変えることが必要であり、地道に粘り強く生徒を指導するしかない。具体的には、生徒面談・学年集会を充実させ各学期末に面談週間を年度当初より計画したり、生徒に学習計画を含めたスケジュール管理を自分でマネージメント出来るようにすることなどから取りかかる。	B	(授業と家庭学習) ・教員と生徒でアンケート結果が違うのは理想のちがいがいい。教員も目標を高く持つ事は重要ではあるが、必ずしも達成が結果ではないので、考え方を変化させるのも必要。 ・目標を設定する、そこから逆算し、自分が今すべき内容が明確になる。そういった意味において卒業後に「どうしたいのか」と、イメージを持たせる指導は学業にとっても、生活面にとっても重要なことであり、「PDCAサイクルの積み重ね」が大切。 ・基礎学力の向上に係る評価項目に、外部模試の結果に基づく客観的なものを導入してはどうか。 ・家庭学習の習慣化には、個々の生徒によって対応が分かれると思う。生徒一人一人が、まず目標設定・認識から始め、次にそれに向かって進むことが大事である。そのためには、生徒と教員が対話をしっかりする必要があると考える。国公立大学に合格する生徒が増えているのは、その良い例かと思う。 (生活態度) ・身だしなみについて、「生徒主体」で決定した事は、生徒の生活態度へもプラス要素の期待が出来ると思う。 ・あいさつが以前に比べてできなくなっていることについては、他校の取組を参考にしてはどうか。
					・家庭学習を習慣化させるための適切な指導ができたと考える教員の割合(教員肯定回答9割)	教員アンケート4	2.5	43	D					
					・家庭学習に真剣に取り組んでいる生徒の割合	生徒アンケート3	2.6	53	C					
					・習熟度が低い生徒対象の試験前や長期休業中の各講座が有効と考える教員の割合	教員アンケート7	2.7	64	C					
					・スタディサブリが学習の習慣化や基礎学力の向上等に寄与している と考える教員の割合	教員アンケート26	2.6	68	B					
					・スタディサブリ(朝学習)に真面目に取り組んでいる生徒の割合	生徒アンケート4	2.9	73	B					
		生徒 1年 2年 3年	(生活態度) ・常に笑顔で気持ちのいい挨拶をするよう意識させる。 ・全体での日常的な服装指導の徹底と継続的な声かけを実施する。 ・登校時にスマホを貴重品ロッカーに保管するよう指導する。	・服装・頭髪等、携帯電話、貴重品ロッカー等の校則をきちんと守っている生徒の割合	生徒アンケート14	3.5	93	A	B	・服装頭髪、基本的な生活態度における評価が、生徒>保護者>教員と高くなった。この評価のズレについて、検証していく必要がある。 ・生徒指導の観点があいまいで、教員自身が指導に困った部分が少なからずあった。明確な基準や事後対応の確立を目指す。 ・「基本的な生活習慣やマナーや社会ルール」の項目に関しては、生徒と教員間で意識に差がある。	・高校卒業後「働く」というイメージを持たせた指導があらゆる場面で必要である。 ・生徒会・各委員会が主体となる活動(挨拶運動、身だしなみ週間、ロッカー使用の声かけなど)を展開する。現在、「服装・頭髪」に関する規定の策定に生徒会が動いているなど、校内での生活全般について、生徒主体で進めると効果が出ると考える。	B	・身だしなみについて、「生徒主体」で決定した事は、生徒の生活態度へもプラス要素の期待が出来ると思う。 ・あいさつが以前に比べてできなくなっていることについては、他校の取組を参考にしてはどうか。	
				・基本的生活習慣(挨拶、身だしなみ、時間厳守等)が確立していると感じている保護者の割合	保護者アンケート11	3.1	85	A						
				・服装・頭髪の指導や遅刻防止などの基本的な生活態度に関する指導ができたと考える教員の割合	教員アンケート8	3.0	82	A						
				・挨拶、返事などのマナーや社会ルールを理解させ、公共心を育てる指導ができたと考える教員の割合	教員アンケート9	3.0	79	B						
②自己有用感に裏付けられた肯定感の醸成	生徒	・JS(情報サポーター)制度により、上級生としての責任感の醸成と実践力の向上を図る。 ・JS委員と連携し、生徒会活動の充実を図る。	・生徒会やJS制度を通して、生徒自らが学校行事等を運営できたと感じている生徒の割合	生徒アンケート29	3.0	75	B	B	・JS活動のマンネリ化もあり活動内容の積極的な提案がなかった点で評価が下がったと思われる。	・生徒の主体性を邪魔することなく教員がアドバイスや助言をしていく必要がある。教員からお願いすることばかりでなく、生徒自ら提案できるような会合を定期的に実施させたい。	B	・JS活動が生徒の成長につながるよう、マンネリ化対策も含め、早いうちに検討が必要。		
			③確かな人権感覚の涵養	人権同和教育	・アンケート(4月)結果に基づいた学習活動(HR等)のPDCAサイクルの推進	生徒アンケート16	2.6						58	C
・差別をはじめとするさまざまな人権課題を自らの問題としてとらえている	意識調査	-				74	B							
・LHRでの人権学習が自らのあり方を見つめ直す機会となっている	生徒アンケート11	3.3				87	A							
④デジタルイノベーション創出人育成のための活動推進	魅力	・生徒は、学校外での様々な活動に、授業で得た知識・技術を活用する。 ・教員自身がGoogleチャットやGoogleフォームを積極的に活用し、教員間の連携を強めたり、効率を上げ、学習基盤を強固にする。	・「情報科学高校で遊ぼう学ぼう講座」「オープン・スクール」参加者100名以上。	校内統計：人	-	109	A	A	・遊ぼう学ぼう講座については、今年度課題研究にて「遊ぼう学ぼう講座班」が新規開設され、生徒主体で企画・運営した。生徒講師も定着し、生徒のスキル発揮の場面が格段に増えたことや、生徒が新たなスキルを身につけることにも繋がった。 ・令和4年度から生徒朝礼の教員複数体制を実現。チャットによる健康観察、欠席情報の共有などで担任をはじめとする教員の負担の軽減にも繋がった。 ・各分掌の調査については、Googleフォームによる調査が定着した。	・コロナ禍で制約がある中でも工夫をして毎月実施できた。次年度以降、本校生徒の成長に主眼をおいた講座のあり方を検討しながら実施していく。 ・チャットの利用については、運用のあり方を検討しながら、全教職員が安心して利用できるよう改善する。	A	・遊ぼう学ぼう講座は年々盛り上がりがあるので良い傾向。コロナ禍の中でよく頑張っていた。今後も継続すると良い。		
			・GoogleチャットやGoogleフォームの活用に向向きに取り組めた教員の割合60%以上	教員アンケート30	3.3	82	A							

		⑤ 人格形成の場としての部活動の推進 (重)経	生徒	・部活動紹介や部活動体験期間の内容の充実を図る。 ・学年会と連携を密にし、部活動加入者が90%以上になるよう努力する。	・部活動活性化のための取り組みを実践することができたと考える教員の割合 ・生徒が部活動などの課外活動に積極的に取り組めるようにしていると感じている保護者の割合 ・部活動やその他の学校行事に熱心に取り組むことができたと感じている生徒の割合 ・学校全体の部活動加入率90%以上	教員アンケート17 保護者アンケート5 生徒アンケート15 校内統計	3.0 3.1 3.4 -	71 81 88 82	B A A B	A	・前年度から比べて評価が下がっている点について、部活動加入率が高くなっている半面、その意欲に教員側が対応しきれていないように思われる。 ・入部率(1月末現在)82%で昨年度を上回る結果となった。内訳としては、1年生79%、2年生74%、3年生94%であった。全体では82%ではあるが、兼部をする積極的な生徒が多く、延べ人数からみると90%の入部率である。	・部活動だけでなく、社会活動・ボランティア等への支援や関わり方について見直し、地域や他校生との交流を含めた新しい活動を模索する。 ・日常的に小中学校や安来高校と合同練習や交流を続けることで、高校でも継続的に活動が続けられる環境をつくっていききたい。本校だけの部活動活性化は難しいので、近隣の学校や地域を巻き込んだ活動にしていきたい。	A	・目標90%の部活入部率は非常に高い。コロナで全体的に活動が制限された反動ともいえる。折角の生徒の意欲を損なうことのないよう外部指導者も含めて検討すべき時代なのかもしれない。
	身につけさせたい資質・能力の育成	① 主体的・協働的・創造的な探究学習の推進 経	教務	・教員が主体的、対話的で深い学びの実現を目指し、研究に努める	・主体的、対話的で深い学びを意識した授業を展開した教員の割合 ・「地域探究基礎」の授業で、探究的な学習ができたと考える生徒(1年)の割合	教員アンケート28 生徒アンケート22	2.8 3.2	64 84	C A	A	・すべての教員が求められる授業像を実践しようと努力や研究をしているが満足できる状態ではないと自己反省している教員が多い。ICTの活用やクラウドデータを用いたアプリの活用は利用がすすんだ。 ・本校の独自の「地域探究基礎」「地域探究応用」とも科目の目標である地域への理解、問題解決への探究活動が生徒評価で高い結果となった。導入初期であり、多くの教員の授業への理解・取り組みの熱意によるところも大きい。 ・3年生からの探究学習の高評価は、探究活動だけではなく授業を始め各種学校行事全体の成果だと思われる。	・生徒の興味・関心を強く惹き、深い思考を促すことができる授業を多く実践していきたい。 ・R4年度に開設された「地域探究応用」の評価・見直しを行い、「地域探究基礎」「地域探究応用」「課題研究」と3年間で成長が図れるよう連携を推進する。 ・今後も地域を題材にした学びでPDCAサイクルを回すことで、「地域探究」の目的を果たすように取り組んでいきたい。	A	・地域を探究するという事は、生徒にとっても大変魅力ある活動ということが総じて高い評価に表われている。 ・課題研究発表会で発表する生徒をみて、年々、研究活動へのやりがいや臨機応変に対応できるようになり、すばらしかった。益々楽しみになった。 ・授業に対する教職員の創意工夫が感じられて大変良い。
			商業	・地域の特徴を理解させ、探究活動を通じて問題解決能力を育成する。 ・各学年において目標を定め、3年間を通じた育成を図る。	・「地域探究応用」の授業で、探究的な学習ができたと考える生徒(2年)の割合 ・1年生：自己評価において、地域への理解が深まったと感じている生徒の割合 ・2年生：地域を基盤とする問題解決の取り組みで意識が高まったと感じている生徒の割合 ・3年間を通じて探究活動による自己の成長を感じている生徒の割合	生徒アンケート22 生徒アンケート18 生徒アンケート19 生徒アンケート20	3.4 3.2 3.3 3.6	91 85 91 92	A A A A					
			教務	・授業公開、授業評価、授業改善のサイクルを通して、教科指導力の向上と充実に努める ・日々の授業の教材研究を充実させる	・公開授業、授業参観を合わせて4回以上行った教員の割合(100%) ・教材研究に積極的に取り組んでいる教員の割合 ・先生は授業内容が理解しやすいよう、教材等工夫をしていると感じている生徒の割合	校内統計 教員アンケート5 生徒アンケート9	- 3.3 3.2	71 93 87	 A A		・2月末現時点での達成率は低いが、後1回で完了の先生が多いので3月中にはほぼ達成できるものと考えている。公開授業ではICTの活用、生徒の端末の活用など授業改善の参考となる授業を公開されている。 ・生徒目線を含めた教材研究への取り組みや理解度を重視した授業となる工夫を教員が重ねていることで生徒が肯定的にとらえられていると考える。 ・生徒端末の活用は一定の効果が認められるが、教員の活用自己評価は低い結果となっている。原因としては質問内の「積極的に」という表現を意識した教員が多く、授業で常に使用しているイメージに捉えた教員が多いためと思われる。また、授業でパソコン室の使用が多い教員も低い評価となる傾向がある。	・3月中旬達成率90%以上とする。来年度も方向性は継続する。公開にあたってはテーマについてより意識を高め、授業内容を深めることで、授業の充実度を感じる生徒の割合を高めていきたい。 ・教材研究はもちろん、ICT機器の活用、評価のあり方等、総合的な観点から授業改善を常に促していきたい。 ・ICT、生徒端末、クラウドを利用したアプリを用いた授業については、使い方のみならず考え方を含めた教員研修を継続する。具体的には、授業で使えるアプリの高度な利用ではなく、IT機器を授業の一部として使用する事から始めるなど、全教員が取り組みやすくなるよう案内や研修を実施していきたい。	A	・ICT機器を活用できるように先生がまず勉強していただきたい。 ・来年度からは生徒全員の端末が揃い、今年よりもやりやすくなるので、頑張ってください。
		② 学習内容と指導の充実	商業	・iPadやChromebookを活用し、生徒の学びを深める	・iPadやChromebookが学習に役立っていると感じる生徒の割合 ・iPadやChromebookを積極的に活用した授業を実施している教員の割合	生徒アンケート5 教員アンケート29	3.2 2.8	82 58	A D					
			教務	・ICT機器や教材を活かした質の高い授業に向け、改善を重ねる。	・島商研表彰生徒(1級2種目以上)の割合が3年生の10%以上。かつ、情報処理国家資格・日商簿記検定2級取得者が合わせて5名以上。	校内統計	-	-	A		・1/31現在 3年生 1級取得 2種目取得者18人 3種目取得者3人 4種目級取得者2人 国家資格 ITパス3人 基本情報技術者2人 日商簿記2級1人 ・3年ぶりに対面開催で実施できた。生徒はITフェアが初めての体験であったが、これまでの伝統と学校全体の取り組みにより有意義なものとなった。生徒アンケートにもその結果が出ている。	・検定の合格者数は一つの目安であり、この数字が最終目標ではない。生徒が社会に出てから本当に必要かつ有効な知識、技術の習得を目指し、教員も指導力、教材研究の推進に取り組みたい。	A	・最終目標ではないが、3年間専門性の高い内容を学んできた成果が明確な数字として表れる項目。資格取得者数が増えて行くことを願っている。情報科学高校の真価を問われる項目といえる。 ・素晴らしい結果である。今後も合格者がきちんと出るよう期待している。 ・ITフェアは対面開催で教育効果が上がる。
			商業	・情報ITフェアの開催	・情報ITフェアに関する活動を有意義なものにできたという生徒の割合	生徒アンケート7	3.4	89	A					
		③ 専門性の深化	商業											
			商業											
			商業											
			商業											
			商業											

※「平均」欄は、評価（あてはまる＝4 ある程度あてはまる＝3 あまりあてはまらない＝2 あてはまらない＝1）を平均したもの

※「評価」欄の基準は肯定的評価の％：A＝80％以上 B＝65～79％ C＝50～64％ D＝50％未満

令和4年度 島根県立情報科学高等学校 学校評価（No. 2）

教育目標	重点目標等	担当	目標達成のための方策	評価項目	評価値の 元データ	R4			評価	自己評価	改善策	学校関係者評価			
						平均	%	評価				評価	コメント		
② 社会人としての規範意識や倫理観を身に付けた感性豊かな人間の育成【人間力の育成】 ① 地域を担う、情報・ビジネスに関する将来のスペシャリストの育成【専門性の育成】 普通教育ならびに情報・ビジネスに関する専門教育を施し、健康で、心豊かな人間性を育成する	学びを支える安心安全な環境	総務 生徒	・防災教育、避難訓練の実施（年3回） ・街頭指導（交通安全運動週間） ・自転車点検（年1回） ・安全に関わる情報の周知徹底 ・安来警察署との連絡・協力	・災害発生時に適切に行動し、安全に避難することができる生徒の割合（90%）	生徒アンケート10	3.2	85	A	A	・今年度も全校一斉避難での訓練を実施し、実際の避難と同様の訓練を実施することができた。 ・外部からのクレームに対して速やかに対応できた。また、バスや自家用車での通学生が増えたことで、事故やクレーム数は減少した。それに伴い、挨拶運動を保護者の方と生徒で実施できたことは良かったと思う。	・「いざというときにどう動くべきか」、生徒が自分のこととして考えられるような訓練のあり方を引き続き検討していく。 ・ヘルメットの努力義務化や道路交通法の厳罰化について、年度当初から注意喚起するとともに、定期的な挨拶運動を実施していきたい。	A	・いざという時の安全行動を身につけてほしい。 ・4月からのヘルメット着用努力義務が、自転車通学者に変化があるか見る必要。		
				・交通ルール及び自転車のマナーを守り、事故防止に努めている生徒の割合	生徒アンケート13	3.5	92	A							
		②生徒理解に基づく組織的な対応	教務 生徒	・学年会、明るい学校推進委員会・教務部とが連携をとり、生徒の支援体制の一翼を担う。 ・生活アンケートの実施及び活用し、情報の共有と組織的対応で指導する。	・明推会等を通して、生徒への支援を適切にできたと考える教員の割合。	教員アンケート24	2.8	71	B	B	・合理的配慮が必要な生徒について、明推会で情報を共有し、支援を提供することができた。評価が下がっている要因は、明推会の議題には一部の教員にとどめる必要があるものもあり、全教員への報告をしないケースがあることが関係すると考える。 ・生活アンケート等の結果から組織的に対応できたと思う。しかし、生徒がこのアンケートを通して悩みを相談できた割合は大きく下がっていた。不登校生徒の増加も相談できない割合が増えた要因と考える。 ・生徒の悩み等の相談について前年度対%比で実数が減少していることが気がかりである。 ・SCによるカウンセリングの件数は毎回ほぼ予約で埋まる状況であり、利用が多かった。 ・多くの悩み事を抱える生徒が、抱えたままになっているのではないか。	・今後も学年会と情報を共有し、明推会を通した生徒支援を充実させる。 ・アンケートや面談だけでなく、家庭訪問の実施や定期的な面談週間の実施等で、自発的に相談できない生徒の話を聞く場を増やす必要がある。 ・安心して相談できる雰囲気づくりを学校全体で作り上げていく。	B	・高校生という難しい年代であり、相談の方法、生徒が心を開いてくれる様に検討が必要。 ・生徒への心の支援は家庭（保護者）学校が継続的に連携を取る事が重要。 ・自己肯定感が低下してきているということなので、不登校生徒の増加は、運動して当然と思われる。各方面で対策が考えられていが、特効薬が見当たらない現状であり、悩ましい事と感じる。 ・生理の貧困についても対応の検討が必要である。	
					保健	・スクールカウンセラーを活用した教育相談の実施。 ・個別の生徒の状況を把握し、必要な支援を協議して、共通理解のもとで支援を行う。	・生活アンケート等を通して、学校生活での悩みなどを相談することができた生徒の割合	生徒アンケート30	2.9						73
			・生活アンケートや面談を通して、生徒の人間関係などを把握し、組織的に対応することができたと考える教員の割合	教員アンケート23			3.1	89	A						
			・先生は、生徒の悩みや困っていることについて誠意をもって相談にのってくれると感じている生徒の割合。	生徒アンケート17			3.0	79	B						
			・学校は、生徒や保護者から様々な相談ができるよう配慮していると感じている保護者の割合。	保護者アンケート4			3.0	79	B						
			・生徒や保護者の悩みや相談ごとに、誠意をもって対応している教員の割合。	教員アンケート16	3.1	89	A								
		進路実現に向けた支援	①進路適性の把握と勤労観・職業観の育成	進路	感染症の状況を把握しながら、年間行事予定に沿って企業説明会・進路ガイダンスを実施する。また感染症対策として希望者対象ガイダンス（密を避ける）等を実施する。	進路に関する行事が有意義であると感じている生徒の割合	生徒アンケート23	3.4	88	A	A	・予定していた進路行事は概ね実施できた。特に企業説明会や企業訪問については、新規に参加企業を開拓し、各科の特色を考慮した内容で実施できた。	・生徒が所有する iPad・Chromebook を活用した業者を介した進路プログラムを提供する。（希望者）	A	・十分に進展していると思われる。
			②希望や適性に 応じた進路実現	進路	生徒・保護者・企業・ハローワークおよび上級学校と連携を取り、的確な情報を得る。面接・小論文等の全校体制を強化する。	進路先が決定している生徒の割合	校内統計	-	93	A	A	・面接練習・小論文で苦戦する生徒が多く見られたが、教員の指導に粘り強くついてきて進路先を決定することができた。また、国公立大学に挑戦する生徒が増え、受験指導を行う教員の伴走にくらいつきながら最後まであきらめずに取り組み、合格者は9名に達した。	・大学への進学希望者が増加している。面接練習と同様、小論文等の受験指導体制も強化にしていきたい。	A	・進学が今後も増えると思われる。 ・すばらしい結果が出ている。進路先の幅も増えて今後にもつながった。継続して頑張っていたきたい。
	進路指導が学校全体で取り組むことができたと感じている教員の割合					教員アンケート13	3.2	89	A	教員アンケート14					
	③進路情報の提供と活用	進路	情報冊子（面接、小論文等）の選定・購入・利用を薦める。進路通信等を活用し、生徒・保護者に求められている情報を迅速に提供する。	適切な進路情報が提供されていると感じている保護者の割合	保護者アンケート6	3.1	85	A	A	・進路資料を気軽に閲覧できるよう、掲示物や資料提示の工夫（季節感や生徒へのメッセージ性を出すなど）した。書籍のジャンルも増やし、情報提供をおこなったが、一部の生徒の利用にとどまった。 就職情報については、3年生に対して求人閲覧サイトを作成し、就職活動の一助とした。	・模試結果の活用方法について、教員・生徒へのレクチャーする機会を設けたい。 ・進路資料の積極的な活用に向けて、引き続きPRを行う。	A	・よく対応してもらっている。		

	学校と地域との協働	①魅力化コンソーシアムと学校運営	魅力	・各専門部会と魅力化推進委員会の実施状況。 ・生徒の活動をコンソーシアムメンバーに共有し、その評価を生徒に返す仕組みをつくる。 ・コンソーシアムの団体と共にプロジェクトを企画・実施する。	・各部会2回以上の開催	校内統計	-	100	A	A	・各部会の活動について、年間2回以上開催することができた。地域との協働は、本校から地域への提案が7件、地域から本校への提案が21件であり、総数28件だった。昨年度総数15件と比べ2倍近くの協働があった。 ・魅力化コンソーシアムの事業本部会議や運営指導委員会にあわせて魅力化推進委員会を行い、各分掌長との目線合わせができた。	・地域からの協働のオーダーが多いことは、地域に必要とされていることの証で、嬉しいことではあるが、生徒・教員の多忙化にも繋がる。生徒にとって有用な学習の機会になっているか、必要以上の負担にならないか、注意しながら進めたい。	A	・外部からも情報高校生への活躍評価を多数聞くようになった。他校との差別化の面でもとても魅力的な取り組みである。 ・年々協働数の増加で大変だが、生徒の為になるものを選択しながら進める必要がある。
					・各部会の活動2つ以上	校内統計	-	100	A					
					・地域の方が、本校の教育に関わるが増したと考える教員の割合70%以上	教員アンケート20	3.6	93	A					
					・地域の人と交流し、意欲的に取り組めたと回答した生徒50%以上	生徒アンケート31	3.1	79	B					
		②小中学校との連携	総務	・オープンスクールを開催し、本校の魅力を体感してもらう。	・オープンスクール参加者が募集定員を上回るようPRする。	校内統計	-	157	A	A	・オープンスクールに参加していただいた中学生は、1・2回合計して来校で149名、オンラインで8名であった。事後アンケートでは、来校して参加した中学生の96%が情報科学高校への進学に前向きな回答であった。 ・中学校で開催される学校説明会については、「学校案内」の構成を「楽しい高校生活と生徒のスキル発揮」というコンセプトで大きく見直し、学校紹介DVDは生徒が制作した動画を交えて作成し、興味を引き親しみを持てるようにした。また、中学校での「プレゼン」は、管理職ではなく適任者を選抜・派遣し実施した。 ・地域との結びつきは多方面にわたり、様々な連携活動を行い、成果を上げている。 ・小中学校との連携は昨年度以上に活発になった。南小学校児童や宇賀荘児童クラブの来校や、広瀬中学校の来校、恒例となりつつある二中学校区の交流会などが実施できた。しかし、関わった教職員が限定的だったため、数値が向上しなかったと思われる。	・オープンスクールの授業体験以外では、J・S・生徒会・寮生など生徒に学校紹介や案内をしてもらったところ、事後アンケートでは生徒から生の声が聞けたと好評であった。来年度は実施方法を今一度見直し、中学生が参加したくなるような工夫をしたい。 ・小中連携等の活動の範囲は広がっており、その成果をPRしている。今後はさらに全体への認知度が高まるようPRの手段を広げていきたい。 ・各学科主任や学科検討チーム、進路指導部と連携・協力して各学科の魅力を伝える仕組みを構築する。 ・地域連携により効果を上げている反面、教員の多忙化にも繋がっているのも事実、教育効果を検証しながら持続可能なあり方を検討する。	A	・先生方の負可にならないように注意し行っていただきたい。 ・学校PRの継続、PRの仕方の検討もして、頑張っていたきたい。
			教務	・中学校で開催される学校説明会等に積極的に参加する。		校内統計	-	157	A					
			商業魅力	・小中学校との連携 ①学校開放講座の毎月実施 ②小中学校教員対象研修の実施 ③出前授業の実施 ④中学校礼法指導の実施	・中学生や保護者に関心を持ってもらえるような「学校案内」や「プレゼン」等を作成できたと考える教員の割合	教員アンケート31	3.3	96	A					
					・連携ができたと感じている教職員の割合	教員アンケート19	2.7	71	B					
	新しい学習基盤づくり	①学習基盤づくり	教務	・3観点別評価について、各教科及び学校全体で議論を深め、本校が掲げる人材の育成するための評価体制を確立する。 ・特別活動の評価のあり方について議論を深め、新しい体制を構築する。	・教科会、教科主任会を通じて十分な情報提供や議論がされ3観点別評価が適切に運用されていると考える教員の割合	教員アンケート25	3.2	93	A	A	・3観点別評価については、昨年度に構築した評価体制をもとに確実に運用するため、教科主任会で運用に向けた準備を重ねた。全ての科目で見通しをもって授業・評価を進めるため、学期はじめに計画表を作成した。 ・昨年度、特別活動評価委員会で整備された評価の観点にしたがって、順調に記録がすすんでいる	・新学習指導要領がR4入学生から学年進行で進められ、評価が3観点評価となり、来年度は2年生の科目が新規に該当する。大きな変更であるため、厳正かつ効率的に評価できるよう授業計画の構築を進めていきたい。	A	・無理のない計画を立てて実施いただきたい。
					・特別活動の評価が適切に運用されていると考える教員の割合。	教員アンケート27	2.8	79	B					

※「平均」欄は、評価（あてはまる＝4　ある程度あてはまる＝3　あまりあてはまらない＝2　あてはまらない＝1）を平均したもの

※「評価」欄の基準は肯定的評価の％：A＝80％以上　B＝65～79％　C＝50～64％　D＝50％未満【1120版】R4学校評価表